



▲昭和27年ごろの市民病院（正面）。病棟の一部は旧陸軍禁野火薬庫の建物を利用していました。



◀現在の市民病院（正面玄関）。



◀新病院のイメージ。平成26年度の完成を目指します。

開院から60年、市民の健康を守り続ける

枚方市民病院

枚方市民病院は、今からちょうど60年前の昭和25年4月15日、陸軍禁野火薬庫の跡地に誕生しました。内科・外科のみで病床数26、医師と職員合わせてわずか21人のスタートでしたが、つらい戦争を体験した市民にとって、爆弾を作っていた場所から人の生命を守る場所に生まれ変わった市民病院の存在は、大きな安心感を与えるものでした。

開院当初、病棟の一部は旧陸軍の建物を改装して使用していました。冬は木造の病室を冷たいすき間風が吹き抜け、大雨のときは雨漏りも。昭和31年から看護師として勤務し、最後は総看護師長を務めた亀井愛子さん（76歳）は、「泊まり込みでバケツを持って走り回りました」と当時を振り返ります。まだ医療や設備が大きく進歩する以前のことです。看護は二交代制。夜勤は一人で担当したため、夜中の検査ともなると休憩もとれない忙しさだったといいます。「人の命を預かっているという思いで夢中でした」。

市民病院は昭和34年に総合病院の指定を受け、地域の基幹病院として市民に幅広く医療を提供してきましたが、昭和37年に建て替えられた現在の建物も老朽化が目立ってきました。現在、平成26年度の完成を目指し、7階建て・病床数335の新病院の整備を進めています。多様な診療に対応できる地域の中核病院として、これからも市民の健康を守り続けていきます。

（平成22年11月号）